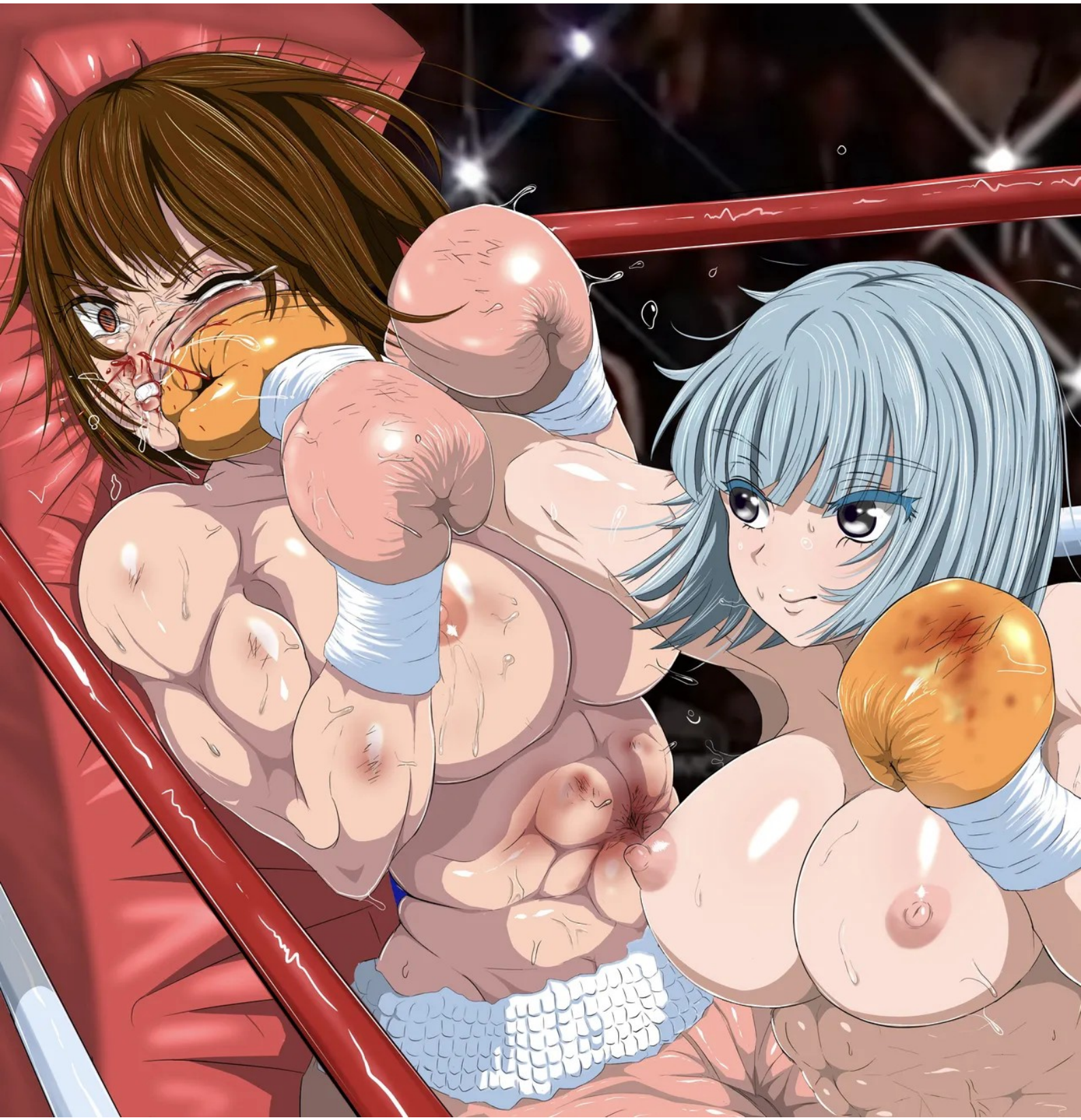


対戦相手が姿を表すと、会場全体がどよめいた。
この地下ボクシングでは試合直前まで対戦相手は知らされない。
が、会場のこの反応を見る限り・・・どうやら一癖ある相手のようだ。
リングインしたのはあどけない顔をした銀髪の女の子だった。
年齢は同じくらいだろう。
おっぱいは・・・私のより少し大きいくらいだろうか。
肉付きがいいが、私ほどの筋肉量は無い。
「どうもはじめまして。あなたみたいな可愛い子と戦えるなんて光栄ね。
怪我させちゃうかも知れないけど、いい試合にしましょ。」
向かい合うと相手が話しかけてきた。
とてもこれから殴り合う相手とは思えない、
リラックスして穏やかな口調に思わずムッとする。
「強いのか知らないけど、そんなおつむの弱そうな喋り方で
これから5ラウンド、私の相手が務まるとは思えないんだけど？
もうちょっと緊張感持った方がいいんじゃないかしら。
歯、なくなっても知らないよ？」
口元に笑みを浮かべたまま、彼女は何も言い返さない。
私の全身を舐め回すように見ている。
まるでこれから仕留める獲物を品定めするようだ。
その目が私をひどくイラつかせる。
「その澄ました顔、ボコボコにしてあげるから。」
カアン！
互いのグローブを差し出し挨拶がわりに軽く突き合わせる。
試合が始まった。

パ

ッ

パ

ッ

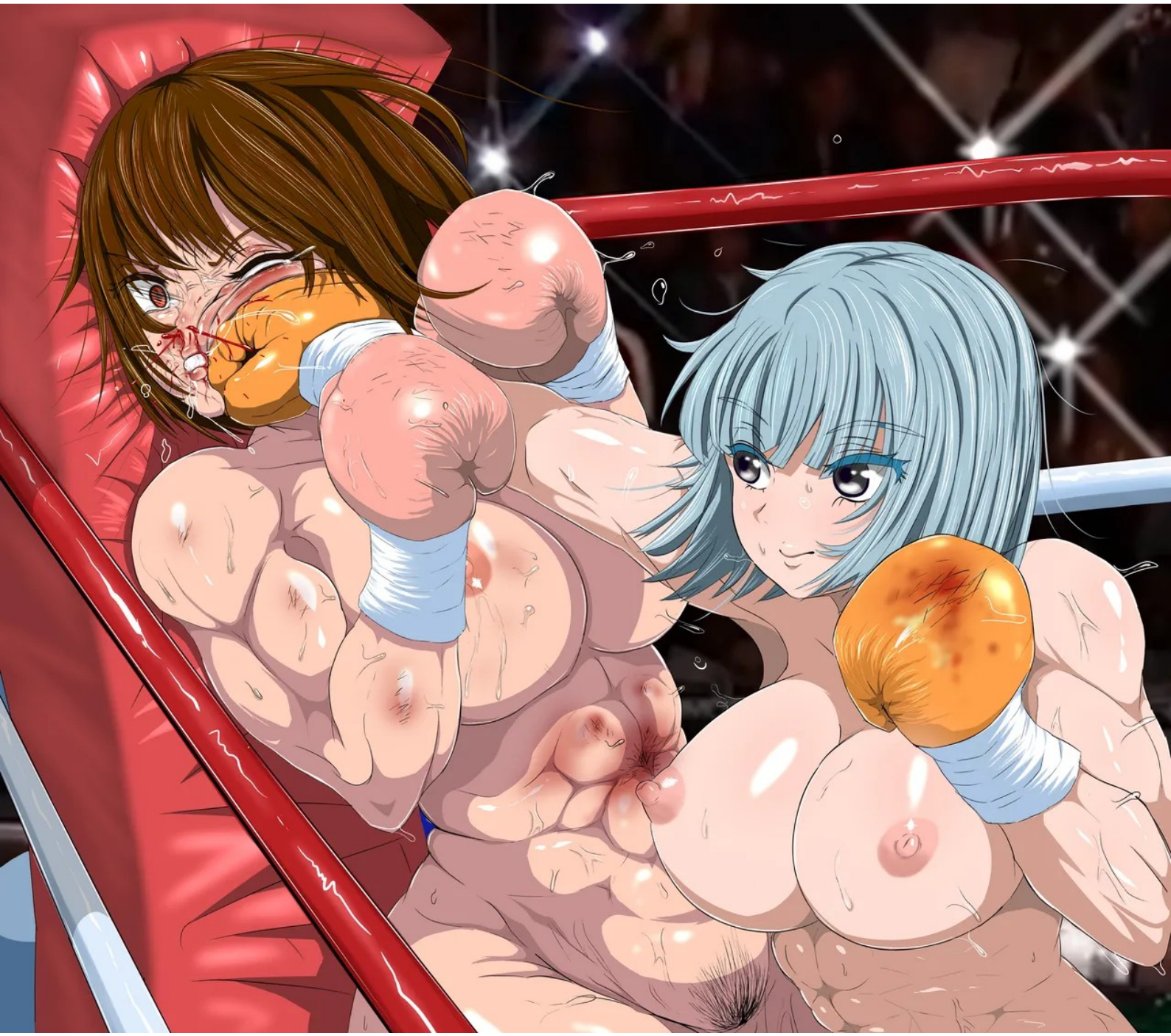
キュ

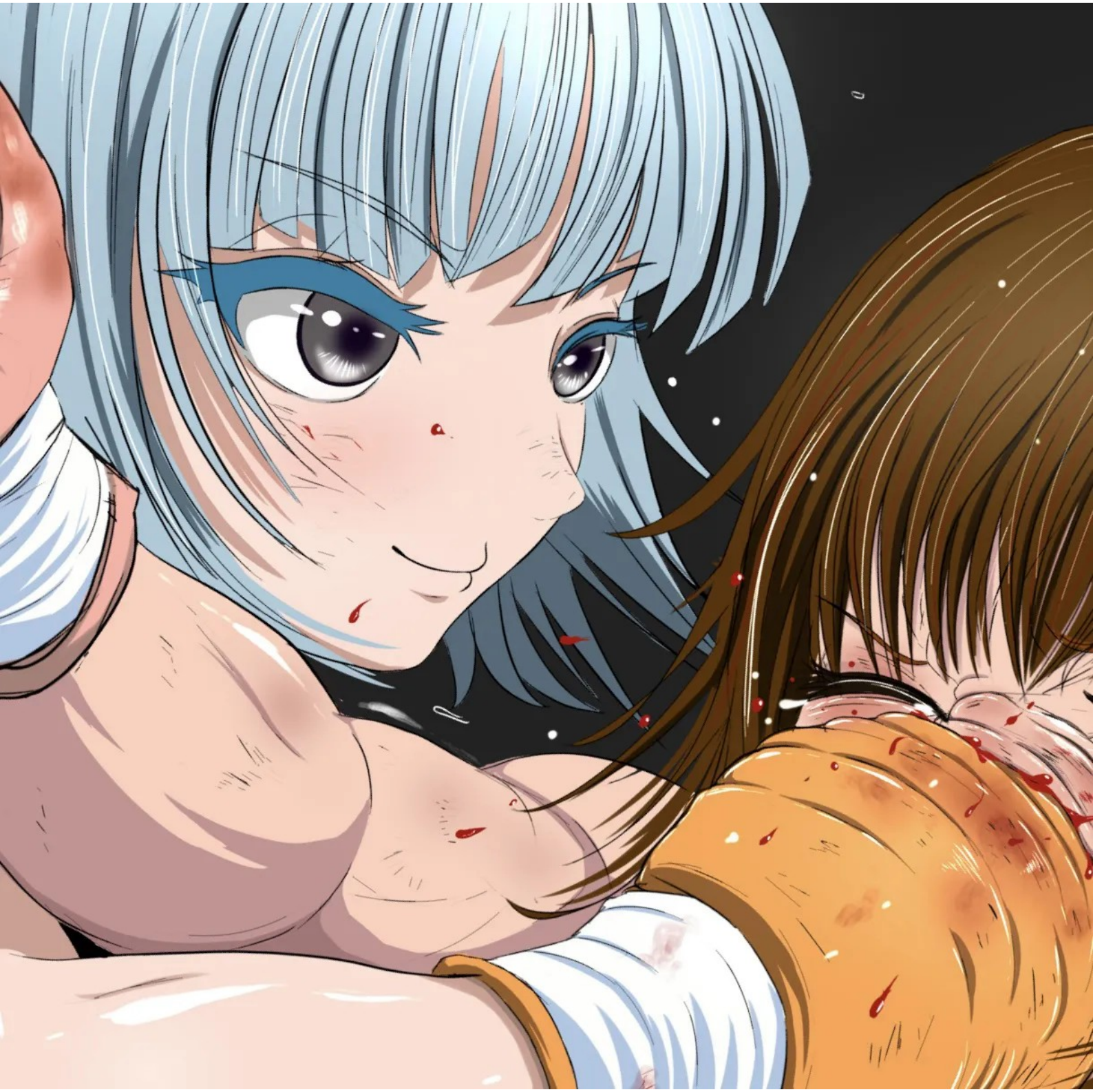
キュッ

「しまっ・・・・!?」
コーナーに追い込まれたと気づいた時にはもう遅かった。
ガードを固めるよりも速く、
稲妻のような鋭いストレートが私の頬をまっすぐ貫く。

**バスッッ!**

「ぶぁえっっ!」
革で肉を打つ音が響き、網膜に火花が飛び散った。
最低限の綿しか詰められていない小振りなグローブが
パンチの衝撃を余す事なく脳に与える。
コーナーに叩きつぶされ、あらゆる体液が搾り出された。
意識が遠のき、試合が思い返される。
試合開始から私は彼女の戦闘スタイルに圧倒され続けていた。
鉄壁のガードは私のパンチを許すことはなく、
カウンターで放たれるストレートは
さながら大砲のような火力でガードを突き破り、私の顔面を破壊した。
戦車のような鉄壁なスタイルに手も足もだせず・・・
この3ラウンド目、私は逃げることしかできなかった。
肉食獣の檻に入れられた餌のように。
意識が戻るとカウントが始まっていない。
ダウンすらしていなかった。
彼女にクリンチで抱きかかえられていたからだ。
その意味がわかり血の気が引く。
「や、やめ・・
「フフ、しっかりマウスピース咥えててね。歯、無くなっちゃうよ??」

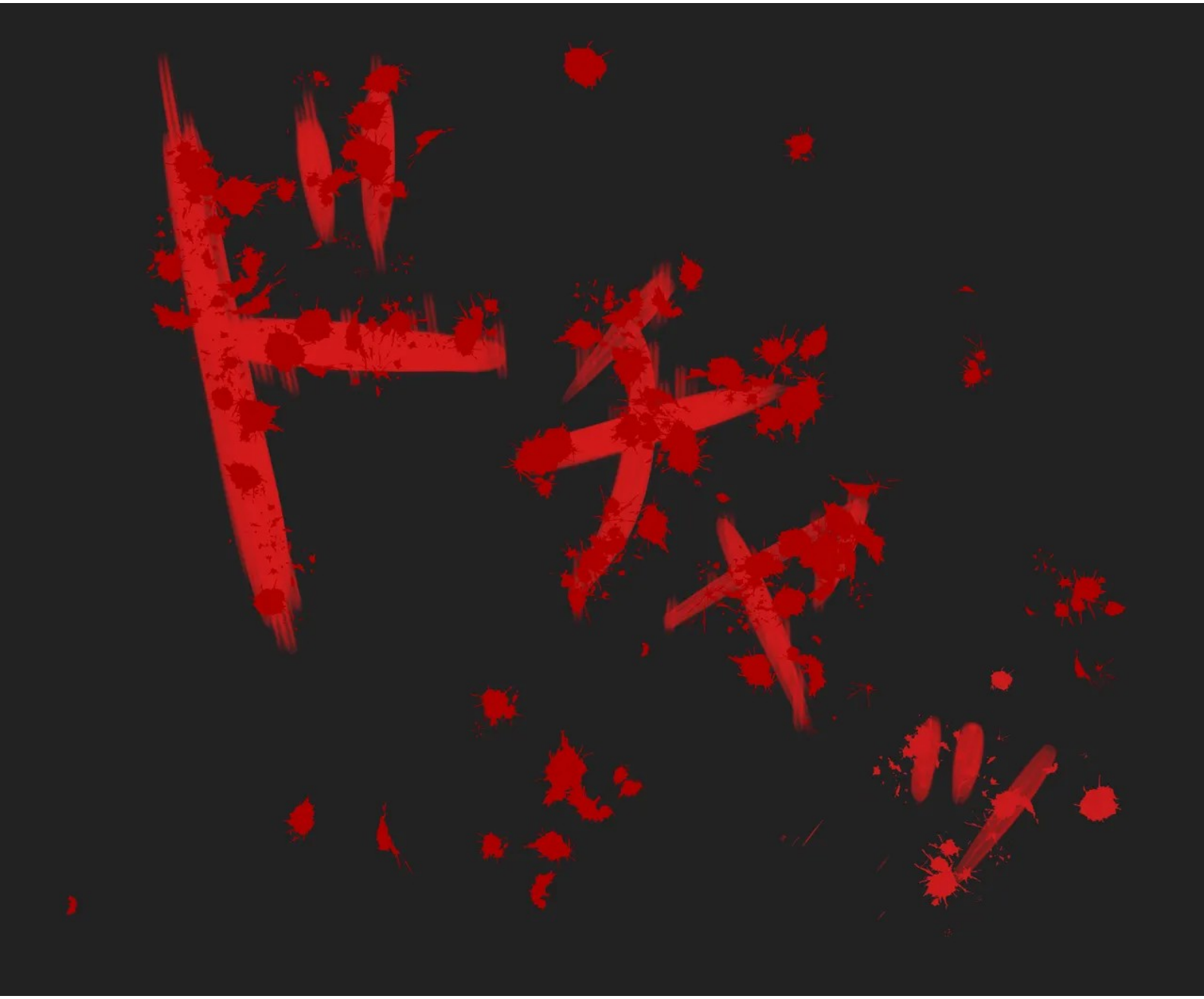


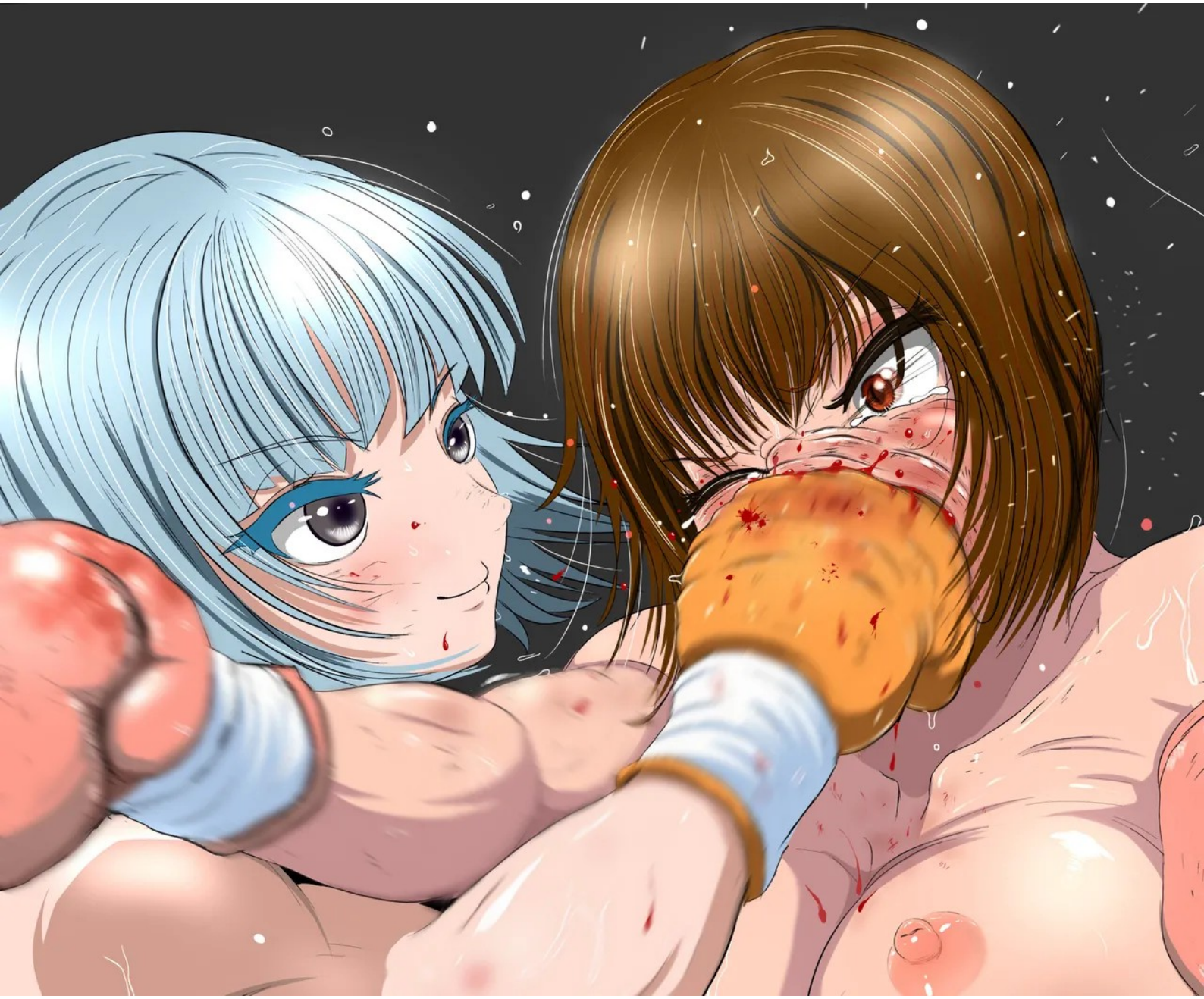


まさか瀕死の彼女から打ち合いに持ち込んでくるとは。
コーナーに串刺しにし，心を折ったはずなのに。流石に驚いた。
私のパンチで血塗れになった顔に，
絶対に負けたくないというプライドが滲んでいる。
やけくそだろうが，痛みや恐怖を克服しようとするその意志。
とても美しく尊い。愛しくてたまらない。
だからこそこの手で壊したくなる。壊して支配したくなる。
発情のような猛烈な破壊衝動に襲われ，股間が熱を帯び，濡れる。
この尊い煌めく意志は大切に粉々にしなければいけない。

お互いに足を止め，ガードもしないまま，正面から殴り合う。
放たれたパンチは汗で滑り，クリーンヒットにならない。
彼女は相当苦しいはずだが，手数が緩むことはなかった。
インファイトが得意なのだろう。その顔に勝利への希望が見えた。
アウトレンジで圧倒してきた私だが，いささかこの状況は危うい。
かわし切れなかった彼女のパンチがあごにヒットする。
一瞬だけ意識がとびかかった。
ひとつ手を間違えれば，たった一発で状況がひっくり返るだろう。
会場の歓声も耳に入らないほど意識が凝縮される。
ヒリヒリした緊張に心が躍る。

彼女が最も得意とするこの打ち合いで，彼女を打ち負かそう。
勝利への希望を粉々に砕く悦びに打ち震える。
激しい打ち合いの中，私の本能が彼女の次の動きを導き出した。
終わりがやってくる。


世界



ドチュッ・・・！　「ぶぼぉッッ」

腐った果実を叩き潰したような，湿った打撃音がリング上に響く。
死角から放った私の右フックがカウンターとなり，
赤く熟れた顔を真正面から捉えた。
衝撃で返り血がとび、私の顔や体に付着する。
グローブ越しに潰れた鼻と唇の湿った柔らかい感触を感じる。
頭蓋骨を確かに捉えた手応えだ。醜い支配欲が満たされてゆく。
お得意のインファイトで打ち負けた彼女。
彼女の受けた苦痛や屈辱に思いを馳せるたび、快感が迸る。
目の前で醜く潰れたこの顔が愛おしくてたまらない。
許されるなら今すぐにこの火照った身体を慰めたい。

ねっとりと赤く糸を引いてグローブが顔から離れる。
濡れた肉塊は派手な音を立てて万歳をするようにマットに崩れた。
会場を割れるような歓声が包む。
カウントさえ必要とせずに試合は終わりを告げた。
担架に乗せられ、力無い身体は医務室へと運ばれて行った。

暖色のスポットライトの元、血で汚れたグローブを見つめる。
いつも試合が終わるたび虚しく思うものだ。だが今日は違う。
なぜなら彼女はきっとこのリングに戻ってくるからだ。
そして私ともう一度対峙するはず。闘った私には分かる。

強くなった彼女をもう一度壊すのが楽しみで仕方がない。